

# パニウム - ナンバー・ツー

## 南の王の興亡

Jeff Pippenger

2025-02-27

前回の記事は次のように書いて終わりました。「10～15節は、北の王、すなわち教皇権が1989年から日曜法に至るまでに遂行した三つの代理戦争を表している。」これら三つの代理戦争は、40節においてアメリカ合衆国が『戦車、船、騎兵』として示されることから始まる。

11節に示され、紀元前217年のラフィアの戦いにおいて歴史的に成就した次の代理戦争は、エジプトの南の王プトレマイオス4世フィロパトルと、セレウコス帝国のアンティオコス大王（アンティオコス・マグヌスとも呼ばれる）との間で起こった。アンティオコスは、北の王国の敗北と領土喪失に対する報復としてエジプトに反撃し、南の王国が以前に彼の王国から奪取していたすべての地域を奪還したことで、10節を満たしていた。彼はそうしたが、エジプトの国境で止まり、このようにして10節を成就し、1989年を象徴した。

しかし彼の子らは奮い立って大軍を集め、そのうちの一人が必ずや来て、押し流し、通り過ぎる。やがて彼は引き返し、彼の要塞に至るまで再び奮い立つ。ダニエル書 11:10.

第二の代理戦争はラフィアの戦いであった。ラフィアとは国境地帯を意味する。その戦場は、アンティオコスが第10節の以前の侵攻を終えた地点を示している。三つの代理戦争は、第一の代理戦争が最後の代理戦争と一致するという意味で、真理に支配されている。三つの戦争—第10節、第11節、そして第13～15節の第三の戦争—は、その最初の成就において同一の歴史的人物によって戦われる。アンティオコス・マグヌスは三つの戦いそれぞれに関与しており、預言的にそれらを一本の線に結びつけている。アンティオコスは最初と最後の戦いには勝利するが、真ん中の戦いではそうではなく、そこでは南の王が勝利する。

ラフィアが国境地帯を意味するのと同様に、ウクライナもそうである。ラフィアの戦いによって最初に成就した第二の代理戦争は、今やウクライナ戦争において成就しつつある。ウラジーミル・プーチンは南の王であり、近代における最初の南の王であるウラジーミル・レーニンの預言上の後継者である。プーチンは、ドイツ再統一の際にNATOは旧ソ連領へこれ以上拡大しないとす、論争の的となっている合意に基づいて、ロシアのウクライナへの対応が行われているのだと繰り返し主張してきた。プーチンの動機は、5～9節におけるプトレマイオスのものや1797年のナポレオンのものを映し出している。三人の南の王はいずれも、破られた条約を根拠に北の王に対する行動を正当化している。

イザヤ書23章によれば、教皇権を象徴するツロの淫婦は、ひとりの王の日数のように七十年のあいだ忘れ去られるだろうが、その期間は、聖書預言における第六の王国、すなわち黙示録13章の地の獣（アメリカ合衆国）が支配する時期であることが繰り返し示されている。

その日には、ひとりの王の年月に従って、ツロは七十年のあいだ忘れられるであろう。七十年の終わりには、ツロは娼婦のように歌うであろう。豎琴を取り、町の中をめぐり歩け、忘れられていた娼婦よ。甘美な調べを奏で、多くの歌をうたい、人々に思い出されるようにせよ。七十年の終わりののち、主はツロを顧み、彼女はその稼ぎに戻り、地の表にある世界のすべての王国と淫行を行うであろう。イザヤ書 23:15-17

象徴的な七十年の期間は1798年から日曜法までにわたり、その期間こそが40節に示されている歴史である。淫婦が再登場するのは、七十年の終わり、すなわち日曜法の接近の時になってからである。このため、この期間、彼女は預言的に忘れ去られているので、10～15節の三つの戦いにおける戦闘は、教皇権の代理勢力によって遂行される。

最初と最後の代理戦争では、北の王が南の王に勝利する。中間の代理戦争では、南の王が北の王に勝利する。ラフィアの戦いは11節の最初の歴史的成就であり、その聖句とその歴史的成就は、教皇ローマの預言的な三日半の支配の日々に関する並行箇所と組み合わされるべき二人の証人を成している。このようにして、ダニエル書11章の二つの聖句は、その歴史的成就を伴って、11節の国境の戦いの預言的特徴を示している。これは、ラフィアの戦いで最初に成就し、その後1798年の終わりの時に再び成就した。

これらの証言は、ウラジーミル・プーチンが現代の「南の王」における最後のウラジーミルであることを裏づけている。「ウラジーミル」はしばしば「世界の支配者」と定義されるが、「mir」という語は「共同体」という意味も正しい。したがって、ウラジーミルは「共同体の支配者」、すなわち「共産主義の支配者」を意味する。プーチンは、ドイツ再統一後に合意された国境を越えてNATOが侵出していることへの自らの懸念に対処するための取り決めが反故にされたことに基づくものだとして、ウクライナへの関与を位置づけている。プーチンの矛先は、ゼレンスキーやウクライナに向けられているのと同程度に、NATOやEUにも向けられている。プーチンがNATO不介入のままではと主張する領域へのNATOとEUの侵出は、セレウコス王がエジプトの王女である花嫁を退けて前妻に戻ったときにプトレマイオスが激怒したことに呼応する。その破られた盟約は、1797年のトレンティーノ条約が破られることを予示していた。ダニエル書11章では、南の王が北の王に打ち勝つとき、そこには破られた条約が関与している。

この破られた条約は、ドイツが再統一された際に、EUがNATOの域外への拡大を制限しようとしなかったことに関係している。この意味で、南の王であるプーチンは、代理勢力によって代表される北の王と戦っている。第二次世界大戦のナチスがカトリック教会の代理であったのと同様に、ウクライナのナチスは、10～15節の第二の代理戦争の象徴となる。三つの世界大戦と三つの代理戦争——そしてどちらの系列でも、ナチスは中間の紛争におけるカトリック教会の代理勢力である。

これらの代理戦争が歴史上三度成就したそれぞれにおいて、Antiochus Magnus はすべての戦いに関わっていた。「Antiochus」という語源と、北の王としての Seleucid kingdom に結びついた象徴性が、Antiochus を反キリスト-ローマの教皇-の象徴として指し示していることは、たびたび示されてきた。しかし三つの代理戦争の歴史においては、Tyre の娼婦は忘れ去られており、そのため「Antiochus」という名に表される「教皇」という象徴は、彼の代理勢力を意味する。最初と最後の戦いでは、合衆国が公然とロー

マの意のままに動いている。11節では、代理勢力はウクライナのナチズムである。しかし、戦争において Zelenskyy を支えてきたし今も支えているのは、合衆国の船と戦車である。第二の代理戦争の表面上では、合衆国は隠されている。Isaiah 23 の七十年の間の教皇がそうであったのと同様に、合衆国は、獣のあらゆる特徴を身につけていくまさにその歴史の中で隠されており、したがって第二の代理戦争が進行すると、合衆国がウクライナのナチズムという代理勢力によって覆い隠されるのは予言的に見てふさわしいことになる。それでもなお、ウクライナが滅びるまでそれを支え続けるのは、地の獣の軍事的・経済的な力である合衆国にほかならない。

南の王がバビロンに赴き北の王を捕らえたとき、またベルティエ将軍が教皇を捕らえたときには、彼はそのままバチカンに踏み込んだが、これは、ウクライナ側からのいかなる抵抗も取り除かれた時点でウクライナ戦争がプーチンの勝利で終わることを示唆している。プトレマイオスが征服した王国はバビロンであり、ナポレオンが征服した王国は霊的なバビロンであった。したがって、ゼレンスキーの王国は、彼を支える臣民によって表される。いまやトランプが地の獣の戦車・騎兵・船による支援を撤回したので、ウクライナの支えはEUであり、NATOの進出に関する条約が破られたというプーチンの主張に耳を貸そうとしなかったまさにそのグループである。

EUのユーロクラットを導く理念はグリーンピース運動である。そのため、ゼレンスキーは「緑」を意味する。ゼレンスキーは、環境主義という愚かなグローバル・アジェンダに導かれているEUの好戦主義者たちの象徴的指導者である。ウクライナ戦争が終結したとき、プーチンはウクライナに対する勝利だけでなく、EU全体とNATOに対する勝利も祝うだろう。

ゆえに、この三つの代理戦争は真実のしるしを帯びている。最初と最後の代理戦争では、『黙示録』13章の海の獣と地の獣の同盟によって南の王は敗北する。初めに、北の王の勝利は、保守的な第一バチカン公会議の教皇（カトリックの伝承であるファティマの秘密の文脈では白、すなわち善の教皇）との同盟によってもたらされた。現在の教皇は、これを書いている時点で臨終の床にあるが、第二バチカン公会議のリベラルな教皇であり、ファティマの秘密の文脈では黒、すなわち悪い教皇である。

第十四節は、「自らを高ぶらせて倒れる『あなたの民の略奪者たち』」が預言的歴史に登場するとき、幻が確立されることを示している。紀元前200年のパニウムの戦いにおける第十三節から第十五節の成就に際し、異教ローマはまさにその戦いに関する諸問題に介入した。パニウムの戦いを扱うこれら三節のうち、第十四節は、その幻がローマによって確立されることを明らかにしている。

パニウムの戦いの歴史において、保守的な第一次バチカン公会議派の白い教皇は、レーガン期に始まった八人の大統領の最後の一人と手を組むだろう。その人物は以前、保守的な第一次バチカン公会議派の教皇と同盟を結んでいた。彼らは1989年に旧ソ連を打倒するためにそうし、最後には、まさにその王国の最後の支配者を打倒するために同じことをする。

レーガン政権期、米国との同盟関係のもとで、ヨハネ・パウロ二世は自分こそがファティマの予言に語られる「善き教皇」であると信じるようになった。その確信に突き動かさ

れ、彼は自らがファティマの予言の成就と理解するものを広めるために世界各地を旅し始めた。こうして彼は史上最も旅した教皇となり、また、『黙示録』13章の「全世界が獣に驚嘆する時が来る」という予言を成就したことで、史上かつてないほど広く認知された教皇ともなった。ヨハネ・パウロ二世の公的な人物像は、米国の最後の大統領と同盟を結ぶ、保守的な第1バチカン公会議型の教皇の典型を体現している。

したがって、レーガンと同時代の教皇の預言的特徴の一つは、彼の公的イメージが道標として印される時点があるということである。その標は十四節にあり、あなたの民を略奪する者たちがその幻を確立するときである。教皇ヨハネ・パウロ二世は、全世界が驚嘆して従った教皇であるという預言的特徴を満たしており、それによって、トランプと同盟を結ぶ保守的な終末期のバチカンIの教皇を指し示している。それが起こるとき幻は確立され、その幻を確立するのは、教皇がパニウムおよび紀元前200年の歴史に自らを位置づけることによってである。

八人の大統領の始まりは、八人の大統領の終わりを例証している。そして第十六節の「日曜法」の直前に、忘れ去られていたツロの淫婦が、レーガンの相当者であるドナルド・トランプと同盟を結ぶことによって、再び歴史の表舞台に現れる。両者は、アンティオコスとマケドニアのピリッポの同盟により表象されているように、共に、幼王プトレマイオスによって表される南の王国の終末世代を打ち倒す。聖書の予言において、子どもは終末世代の象徴であり、ウクライナ戦争の後、プーチンは、軍事的勝利によって高ぶり、ある種の政教上のジレンマにおいて道を踏み外す南の王たちの歴史を繰り返すであろう。

このように、1989年と第一の代理戦争を表す第十節は、始まり、すなわちヘブライ文字の第一文字である。ウクライナ戦争を表す第十一節のラフィアの戦いは、ヘブライ文字の第十三文字である。数13は反逆の象徴であり、ウクライナ戦争における代理軍はナチスであって、現代世界における反逆の最たる象徴である。ヘブライ文字は二十二文字から成り、パニウムはその最後の文字である。したがって、アルファベットの第一・第十三・第二十二文字を結合して形成されるヘブライ語の「真理」という語は、これら三つの代理戦争の構造を真理として指し示す。ヘブライ文字の第二十二にして最後の文字は、神性と人性との結合を象徴しており、近い将来におけるパニウムの戦いの成就是トランプの大統領任期中に起こる。トランプは、二期を務めた第二十二代の大統領である。

パニウムは二重の同盟関係にかかわる二重の証言を有しており、いずれの言及においても、その同盟は二者間の階層的関係を指し示す同盟として示されている。フィリッポスとアンティオコスとの同盟は戦略的なもので、東地中海におけるプトレマイオス朝およびローマの影響力に対抗することを目的としていた。とはいえ、彼らの協働はパニウムの戦いそれ自体に焦点を当てておらず、アンティオコスはこの遠征をフィリッポスの直接的な軍事関与なしに独力で遂行した。フィリッポスの役割はむしろ間接的であり、ギリシアとエーゲ海においてローマおよびプトレマイオス朝の同盟者を牽制することによって政治的・戦略的支援を提供し、アンティオコスがコイレ・シリアに専念できるようにした。史家は一致して、同盟においてより強勢であったのはアンティオコスであり、実際に戦いを交えたのはアンティオコスただ一人であったことを指摘する。彼らの同盟は、アレクサンドロスの旧王国に結びつくより広域を対象としていた。ゆえに、その同盟は、キリストが人々の間を歩まれた時代にパニウムが呼ばれていた名であるカイサリア・フィリッ

という名称に表徴されるように、首位の指導者と劣位の従属者とを有している。したがって、カイサリア・フィリピはアンティオコスとフィリッポスに符合する。というのも、カエサル・アウグストゥスと分封領主ヘロデ・フィリポの双方によって象徴されるその同盟において、より強勢であったのはカエサルであったからである。

「テトラルク」という語は「四分の一の支配者」を意味する。カエサルは王国全体を支配し、フィリポは領土の四分の一を治めた。したがって、パニウムおよびカイサリア・フィリピの同盟において、フィリポの象徴は主観的關係に置かれることになる。ヘロデ・フィリポにおいて、われわれは二つの血統の象徴を見るが、それはいずれも神との破られた契約關係の象徴である。さらに、アレクサンドロスの王国が四つ、すなわち四人のテトラルクへと分割されたことの、四分の一という余響も見いだされる。フィリポとは「馬を愛する者」を意味する。

ウクライナ戦争の終結時に成就するパニウムの戦いにおいて、アンティオコス・マグヌス、すなわちアメリカ合衆国は、ロシアを撃破し、フィリポによって表象される劣位の一勢力と同盟を結ぶであろう。その劣位の勢力は関与するが、戦いそのものには直接は加わらない。この戦いはアメリカ合衆国とプーチンとの間のものとなり、明らかに、プーチンの苛立ちと高慢によって引き起こされる宗教的論争と直接に関わることになる。これは、ラフィアの戦い後のプトレマイオス四世フィロパトルおよびユダの王ウジヤが示しているとおりである。プトレマイオスとウジヤは、軍事的成功によって高ぶった南の王たちであり、本来祭司のみが遂行すべき聖務に自ら従事しようとした。ウジヤはその企てのゆえにらい病を患い、プトレマイオスは激怒してアレクサンドリアでユダヤ人五万人を殺戮した。

第十三節は、共同体の現代の王、すなわち共産主義の最終世代であるウラジーミル・プーチンのロシアと米国との戦いを特定している。トランプはこの戦いに勝利するが、その際、王国の第四の部分からの同盟者の助けを得る。ただしその同盟者は実際には戦いの場にはいない。現在の出来事がそれを物語っているように、私たちは第十一節の結末に近づいている。ラフィアに象徴されるように、プーチンはウクライナに対して勝利するだろう。その後、彼は、らい病のために死ぬまで家に隔離されたウジヤに象徴されるように、徐々に没落を始める。紀元前217年のラフィアでの勝利の後、プトレマイオス4世フィロパトルの治世は、腐敗、浪費、そして不誠実な助言者への依存によって悪化した。彼は紀元前204年に死去したが、おそらくは幼い息子プトレマイオス5世のために権力を確保する陰謀の一環として、大臣のソシビオスとアガトクレスによって暗殺されるか毒殺されたのだろう。この波乱に満ちた結末は、ヘレニズム時代の王宮に共通する不安定さと陰謀を反映しており、プトレマイオス朝エジプト衰退の重要な転換点を画した。

アレクサンドロスの死後、世界支配をめぐる闘争のうちに生じた文字どおりの成就によって予表された「南の王」の霊的成就の特徴の一つは、「革命」である。フランスはフランス革命期に、霊的な「南の王」となった。現代の「南の王」であるロシアは、ロシア革命において誕生した。フランス革命に導入された思想が、フランス革命の無政府状態からソビエト革命の共産主義へと成熟していったという過程そのものが、「南の王」の特徴である。共産主義は革命を通じて世界に広がった。

現代において、CIAは非政府機関を利用して世界中の国家の転覆に取り組んできた。そして、彼らが繰り返し用いてきた段階的な計画は、いわゆるカラー革命である。南の王は竜の勢力であり、グローバリストもまた竜の勢力であり、CIAのカラー革命は竜の勢力のしるしである。霊的な南の王としてのフランスの歴史は、その系統の預言の結末を画する独自の歴史を有している。

その結末はナポレオンによって象徴されている。フランス革命は南の王としてのフランスの始まりを画し、ナポレオンはその終わりを画する。歴史家たちは、ナポレオンをワートルローへと導いた一連の段階を指摘しており、これによって、バビロンとベルシャツアルが一夜にして陥落したのとは対照的に、最初の霊的な南の王の終焉が段階的に進んだことが示される。現代の南の王の最初のウラジーミル、ウラジーミル・レーニンは、一連の脳卒中により2年にわたって死去した。ヨシフ・スターリンが彼に毒を盛ったと推測する者もいるが、ちょうどプトレマイオス4世が側近に毒殺されたと推測する者がいるのと同様である。ソビエト連邦に代表される現代の南の王の終焉もまた、革命によってもたらされた。

ソビエト連邦の終焉に寄与したモスクワでの抗議は、1991年8月のクーデター（1991年8月19～21日）の最中に起きた大規模な市民抵抗であった。この出来事は、ホワイトハウスの防衛とボリス・エリツィンの指導を中心に展開し、ソ連の強硬派を直接的に弱体化させ、体制の脆弱さを露呈し、ソビエト連邦の崩壊を加速させた。以前のモスクワでの抗議（例：1987～1990年）やバルトの道（1989年）が機運を築いた一方で、1991年8月の抗議はモスクワにおける決定的な転換点となり、1991年末までにソビエト連邦の解体へとつながった。南の王としてのロシアの歩みは、革命に始まり、革命に終わる。ソ連の終焉は王国の漸進的な解体であり、プトレマイオス、ウジヤ、ナポレオン、さらにはウラジーミル・レーニンのそれも同様であった。プーチンの終わりは漸進的な失墜であり、それはウクライナ戦争が終結した途端に始まる。彼の終わりはパニウム（パンナム）の戦いの際に、米国が実際にはその戦いに参加していない同盟国から支援を受けながら王国の支配権を握ることで、もたらされる。

続きは次回の記事でお届けします。